第４章

奇経八脈治療のバリエーションを考える

前章でも紹介したように，奇経八脈を用いた治療法の代表的なものは八脈交会穴治療です。一般の臨床では督脈や任脈上の経穴に対する施術も行われますが，システム的に用いられる奇経八脈の治療法としては八脈交会穴を用いたものがオーソドックスといえます。

しかし，奇経八脈を用いた治療をするにあたって，施術にもっとバリエーションがあってもよいのではないでしょうか。奇経八脈は経脈であるため，正経脈と同じように循行経脈治療や前後治療などを行うことができます。ここでは，単一の奇経脈を用いた治療法と，複数の奇経脈を組み合わせたシステム的な治療法を，いくつか提示して述べてゆきたいと思います。

【奇経治療の種類】

１）単一の奇経脈を用いた循行経脈治療

①１奇経脈上の単一穴を用いた循行経脈治療（単一穴治療）

②１奇経脈上の２穴を用いた循行経脈治療（起始穴・終止穴２点治療）

２）複数の奇経脈を用いた循行経脈治療

①２奇経脈による陰陽カップリング配穴治療

②その他の２奇経脈システム治療

③３奇経脈による三才合一治療

1　単一の奇経脈を用いた循行経脈治療

この治療は，奇経脈を１つ選び，その循行経路を疏通することで病態の改善をはかるものです。この治療を行うためには，奇経八脈の流注を理解していなくてはなりません。督

脈・任脈・帯脈は独自の流注をもつため，治療の刺激も奇経脈上を伝達されるといえます。しかし，この３脈以外は，正経脈の走行と伴走したり，また治療に用いる経穴も正経脈に属したりしています。したがって，奇経脈に対する治療のつもりが，正経脈への刺激の伝達となってしまうことがありえます。このことが，単一穴による奇経脈の循行経脈治療があまり行われていない原因といえるでしょう。

奇経脈の疏通を目的として配穴をする場合には，奇経脈の起始穴と終止穴を同時に取穴する方法が推奨されます。この２点を配穴することで，経穴の刺激が正経脈へ伝達されることなく奇経脈上を流れる確率が高くなると考えられるからです。

しかし，単一穴による治療が不可能というわけではありません。単一穴に施術を行い，刺激伝達が奇経脈に発現した場合は，奇経脈が実在すると実感でき，感動的でもあります。単一穴による施術によって奇経治療の効果を上げるには，刺激の工夫と患者に対する言葉による誘導が必要となります。このことについては，別に述べたいと思います。

１）１奇経脈上の単一穴を用いた循行経脈治療（単一穴治療）

奇経脈上の単一穴による循行経脈治療は，鍼刺激に強く「得気」を好む人に向いています。循行経脈治療であるため，奇経脈の走行上の病態に対し経脈を疏通させることで改善をはかります。循行経脈治療は，基本的にその経脈の気血津液の滞りがその適応となります。したがって，経脈上の「痛証」に対して用いられることが多くなります。単一穴による治療では，特にその傾向が強くなります。

単一穴だけで奇経八脈の特異的な病証を治療することもできますが，効果を発揮させるためには，手技の工夫や刺激量の調整が必要になります。

経脈を疏通させるための刺鍼の工夫と「得気」について述べる前に，単一穴による循行奇経脈治療の適応や配穴について，陽維脈を例にあげて説明していきたいと思います。

たとえば，側頭部に頭痛を発症したとします。その発痛部位が陽維脈の走行部であるときには，陽維脈の起始穴である金門を選択します。痛みが強い場合や急性の発症であるときには，郄穴の陽交を用います。鍼刺激に慣れた患者の場合には，刺鍼後，各種の手技を加えて得気を得ます。理想としては愁訴の部位まで，この例では側頭部まで鍼響が達するとよいのですが，そこまで行かずとも上行性に響くようにします。得気を獲得できたならば，その後 10 分間程度置鍼すれば効果は十分に出ます。鍼刺激に過敏な患者の場合には，刺鍼しただけで経脈に沿って響く感覚が生じたりします。そのような感覚が生じなくても 15 分間ぐらい置鍼すれば効果は出ます。

陽維脈の適応は，走行上の痛証および熱症状や皮膚症状です。感染症による発熱・更年期障害のホットフラッシュ・のぼせ症状，また頭部の熱証による脂漏性湿診などに用いられます。皮膚症状は，その発症原因が複雑なものが多いため，陽維脈単独での治療では効果が弱いことが多いと考えられます。しかし，陽維脈の走行上の限局的な皮膚炎には，疏通経絡を繰り返すことで効果をあげることができます。

治療する経穴の選択については，循行経脈治療は四肢の要穴を使用することがオーソ